

台日接触場面における日本語によるグループ討論のフレーム分析

——討論の骨格に焦点を当てて——

陳 明 涓*

キーワード: フレーム, グループ討論, 台日接触場面, テーマ間の移行

要 旨

異文化コミュニケーションの場で発生する問題について多くの研究が行われた。その原因の一つとしてフレーム (Frame) が指摘されている。同じ文化背景を持つ同士の間ではフレームは一種暗黙の了解であり、あまり意識されていない。しかし、文化を異にする者との間ではその違いは顕著になる。

陳 (2002) はグループ討論を対象に、台湾と日本の母語フレームの対照研究を行った。そして、「討論の開始部」「テーマ間の移行」「ポーズ」「発言順番と進行役」「トピックの転換」と「討論の終結部」の六つの観点から両者の特徴を提示した。本稿はその結果を踏まえた上で、対象を台日接触場面に移し、フレームの骨格である「討論の開始部」「テーマ間の移行」「討論の終結部」の分析を行った。そして、① 学習者の母語フレームより目標言語である日本語フレームの影響が比較的強いということ、② 日本語フレームは日本人だけでなく台湾人によっても積極的に行使されていたこと、③ 学習者の母語フレームの適用が日本人参加者にも許容されるものと許容されないものがあること、の三つの結果が分かった。

今後は「ポーズ」「トピックの転換」「発言順番と進行役」などについての分析を行い、日本語による接触場面のフレームの実態をより明らかにし、中国語を使用する混合グループのデータを集め、接触場面の討論フレームの全体像を解明していきたい。

1. はじめに

文化を異にする者同士のコミュニケーションにおいて双方が持つ違和感や誤解を対象として多くの研究が行われ、その原因の一つとしてフレーム (Frame) の存在が指摘されている (Gumperz 1982, Goffman 1986, Tannen 1993)。フレームとは、言語活動に対する期待が構造化されたものを指す。我々は自分が所属している言語・文化集団により独自のフレームを形成しており、無

* CHEN Ming-jan: お茶の水女子大学大学院人間文化研究科比較文化研究学専攻。

意識のうちにそれらを参照して言語行動を行っているという。同じ文化背景を持つ者同士の間では、そのフレームは一種暗黙の了解であり、表面化することはない。しかし、文化を異にする者同士の間ではそれが顕在化する。しかも、語彙や文法などとは異なり、フレームによって引き起こされた問題の多くは当事者にとって「理由の分からない苛立ち・不完全感」として残ることが多い。特に第二言語習得途上の者にとって、それはクリアしにくい問題として立ちはだかることになる。このような問題を解決するため、目標言語及び自分の母語のフレームを知り、接触場面に対する備えを準備することが必要であろう。しかし、同時に、接触場面自体の実態を明らかにすることも求められる。

本稿では数多くのフレームの中から、接触場面のグループ討論のフレームに焦点を絞って、分析する。グローバル化の進行の中で、学校や職場はもちろん地域においても言語文化を異にする人々同士の小集団によるグループ討論が頻繁に行われるようになり、その重要性は増してきている。接触場面のグループ討論フレームがどのように作り出されているのか、参加者の母語フレームと目標言語フレームを対照しながら、実証的に探る。

2. 先行研究

様々の言語の母語フレームについては数多くの研究が行われてきている。しかし、小集団討論場面を扱う研究は多くない(Watanabe 1993, 久米・徳井・徐 2000, 陳 2002, 徳井 2002)。例えば、Watanabe (1993) は日本語母語話者と英語母語話者による母語の討論場面を比較し、それぞれの母語フレームを探った。その結果、日本語とアメリカ英語によるグループ討論のフレームは、日本語母語話者グループは英語母語話者グループよりも ① 討論の手順や形式をめぐるやりとり時間に時間をかけること、② 討論中の論の展開は普段の日常会話と差のないこと、③ 複数の論点や立場から討論に参加すること、の三点において顕著な違いがあることを指摘した。陳(2002)は「フレームは文化に依存し、ある言語活動を行う際に必要とされる知識と表出された現象の総体」とフレームを定義し、日本語母語話者と台湾人中国語母語話者のそれぞれの母語によるグループ討論場面のデータを対照分析することで、台・日のグループ討論のフレームを探った。その結果、台・日の母語フレームの特徴を「討論の開始部」、「テーマ間の移行」、「ポーズ」、「発言順番と進行役」、「トピックの転換」、「討論の終結部」の六つの側面から捉えることができたとしている。表1に示す。

「開始部」に注目すると、日本語母語話者グループ(以下「日本グループ」と略す)では討論内容に入る前に討論の進め方についてのやりとり(進行役の選定、時間配分、討論の具体的な進行など)が多く観察された。他方、台湾人中国語母語話者グループ(以下「台湾グループ」と略す)ではそのような討論の進め方についてのやりとりは全く見られず、実験者からの「始めて下さい」と

表1 台日のグループ討論フレームの特徴

	台湾グループ	日本グループ
開始部	素早く討論内容に入る	討論の進め方を先ず決める
テーマ間の移行	必要な手順が少なく、1人でも移行が可能	必要な手順が多く、移行には2人以上が関与。「クッション」の存在
ポーズ	短いポーズが殆ど	長いポーズも目立つ
発言順番と進行役	発言順番は自らとり、進行役は自薦が多い	発言は他者からの指名を待って行い、進行役は他薦
トピックの転換	一方向の線状に転換	派生や回帰により全体が網状
終結部	1人でも終結できる	複数参加者の同意のもとに終結

いう教示が終わるや否や直ちに討論そのものに入った。また、「テーマ間の移行」(実験者より提示された三つの討論テーマの間の移行)及び「終結部」に関しては、日本グループではいくつもの手順を踏み、2人以上の参加者が協力しながら共に行うのに対して、台湾グループでは手順が簡単であり、1人でそれらの過程を完成することも見られた。日本グループのテーマ間の移行に見られるもう一つの特徴は「前話者の発言をまとめる」「笑いで場の雰囲気のを和らげる」「次のテーマに移行せざるをえない理由を述べる」と解釈される言語行動が見られたことである。陳(2002)ではこれらをまとめて「クッション」と名付けている。あるテーマのやりとりを終わらせ、次のテーマの討論に移行するという事は、その時点まで築いてきたグループメンバー間の安定した関係を一旦中断し、新たな関係に入ることを意味する。そこで、「前話者の発言をまとめ」「笑いで場の雰囲気のを和らげ」「次のテーマに移行せざるをえない理由を述べる」ことで「クッション」をおき、移行に伴う中断によってもたらされるマイナス効果を和らげることが目指されるのではないかという考察を行っている。そして、これは台湾グループには見られない特徴であるとしている。

その他にも、台湾グループでは討論中のポーズが短く、自ら進んで進行役になったり、発言順番を取ったりするのにに対して、日本グループではポーズが長くしかも頻繁に起こり、また進行役も発言順番も他者から指名されるのを待つ傾向が見られたとされている。以上の結果から、陳(2002)は、両者のグループ討論フレームを「内容重視で個人単位」の台湾、「形式重視で集団単位」の日本として特徴付けている。

それでは、このように日本語とは対照的な母語フレームを持つとされる台湾人中国語母語話者が日本語で日本語母語話者とグループ討論を行う際、どのようなフレームによって討論に参加するのだろうか。先行研究は母語フレーム間の対照研究が多く、接触場面を対象とした実証的な研究はあまり行われていない。本稿では、陳(2002)の研究を踏まえ、接触場面におけるグループ討論フレームの分析を、参加者の母語フレームと目標言語フレームを対照しながら進めることに

注目する¹。

3. 研究目的と研究課題

「グループになって話し合うとき、中国人は唐突に自分の言いたいことだけを言い、あまり周囲の空気が読めない」と指摘する日本語母語話者は多い。こうした問題は、一つには日本語能力が低いことに起因する可能性も考えられる。しかし、日本語能力上の問題が少ない上級者に対しても同様の指摘がなされていることから、必ずしも言語だけの問題とは言えないかもしれない。「中国人は唐突に自分の言いたいことだけを言い、あまり周囲の空気が読めない」とはどのようなことを指しているのだろうか。本稿では台日接触場面のグループ討論をデータとし、フレームの観点から、その実態を明らかにすることを目的とする。そのために、以下2点を研究課題として設定した。

1. 台日接触場面では、どのような討論フレームが構築されているか。それは、目標言語(日本語)フレームと中国語母語フレームのどちらにより強く影響されていると考えられるか。
2. 台日接触場面では、中国語母語フレームはどのように行使されているか。

4. 分析データ

本研究では、台日母語場面を対象として母語フレームを探った陳(2002)の研究方法を接触場面に適用する。陳(同上)は母語話者同士4人を1グループとし、それぞれのグループに母語でグループ討論を行うように教示した。本研究では、2名の台湾人日本語学習者と2名の日本語母語話者で一つのグループをつくり、三つの討論テーマ²を与えて、日本語で討論を行うように教示した³。討論時間は15~20分とした。分析データは10組(40名)である。本研究が分析対象とする

¹ 本研究が主な先行研究として取り上げた陳(2002)はある大学の年報に掲載されたものに過ぎず、一般的に支持されたものとして扱えるのかという点で疑問が残ると思われる。しかし、そのような限界をもったものであることを前提とした上で、そこで導き出された両言語の母語場面の結果を接触場面のそれと対照する視点は、フレーム分析を進める上で一定の意義があるものと考えられる。

² 各グループに討論テーマとして与えた三つのテーマを以下に示す。

1. 日本語母語話者: どうして今の専攻を選んだのですか。
非日本語母語話者: どうして日本に留学することを選んだのですか。
2. 日本語は学習しにくい言語だという意見があります。この意見に賛成ですか。それとも反対ですか。その理由は何でしょうか。
3. 《次の二つのテーマから一つを選んで、討論してください。》
 - ① 子供ができたなら、母親は仕事をやめて、子育てに専念するべきだということをどう考えますか。討論した上で、グループとして結論を出してください。
 - ② 死刑を廃止することをどう考えますか。討論した上で、グループとして結論を出してください。

³ 依頼者の設定を討論活動の始まる前に教示するが、一旦討論が始まると全てのこと(時間を含めて)はグループのメンバーに一任し、依頼者は如何なる指示も接触もしていない。また、活動の設定を短い時間

接触場面のグループを、陳(2002)が研究対象とした母語場面の日本グループ、台湾グループと対照がしやすいように、「混合グループ」と呼ぶ。討論参加者は大学或いは大学院で勉学している大学生・大学院生で、平均年齢は日本語母語話者(以下「日本人」と記す)が23歳(19歳から30歳まで)、台湾人中国語母語話者(以下「学習者」と記す)が29歳(21歳から35歳まで)である。学習者と日本人の平均年齢に6歳の差があるが、それは学習者の多くは母国にて大学を卒業してから来日した結果である。この結果は日本の大学・大学院で学ぶ学生・院生の実状を反映しており、敢えて同じ年齢で揃えることはしなかった。なお、学習者の日本語学習歴は平均7.4年である。参加者についての詳細は稿末に添付したデータ一覧を参照されたい。

録音機で録音⁴したグループ討論の一部始終を文字化した。使用言語は日本語としていることから、文字化は日本語で行う。しかし、発話の中に明らかに中国語であると分かる場合はそのまま中国語で書き記す⁵。なお、本稿の会話例で使用した記号については脚注⁶に提示した。

5. 分析結果と考察

グループ討論のフレームは討論の全体との関わり方から大きく二つに分類することができる。一つはグループの骨組み・構造を対象とするもので、具体的には「討論の開始部」「テーマ間の移行」「討論の終結部」を指す。他の一つは討論の内容を対象とするもので、具体的には「ポーズ」「発言順番と進行役」「トピックの転換」など討論全体を通して観察されるものを指す。本稿では、この討論フレームの骨格と考えられる構造に絞って分析を行う。

5-1. 討論の開始部

電話会話を「もしもし」で始めるのと同様、グループ討論にも討論の開始を示す部分がある。

で複数のテーマを扱うという設定にした理由は、実際の教室内でのグループ討論(時間制限ありの場面)を想定していることと、異なる性質の質問に対する参加者の取り組み方を見るという理由からである。

⁴ 録音は二つの録音機器(カセットレコーダーとICレコーダー)を同時に使用して行った。録音場所は教室が最も多く、他にはビルのロビーと静かな喫茶店を使った。

⁵ データの中には混合グループの討論中、1人の学習者がある単語が思い出せず、隣にいるもう1人の学習者に中国語で尋ねた部分がある。その場合、文字化データはそのまま中国語で書き記した。

⁶ 会話例に使用した記号は以下の通りである。

TM*	台湾人男性	[重なり
TF	台湾人女性	?	語尾が上昇している
JM	日本人男性	*	聞き取れない発音
JF	日本人女性	@	笑いながら発話する
@	笑い	ポーズ(数字)	ポーズ(秒数)

*もし、1グループの中にTMが2人いる場合、分けてTM1とTM2と表記する。これはTF、JM、JFの場合も同じである。

フレーム分析の際、これは同時にフレームの始まりを意味し、分析上極めて重要である。本稿は実験者の最終の発話(「それではお願いします」、Request Utterance: 以下「RU」と記す)から討論参加者による討論内容に関連する最初の発話(「どうして...(略)...(テーマを読み上げる)」、Discourse Utterance: 以下「DU」と記す)までを討論の開始部とし、RU から DU までの過程を分析した。

まず、開始部に現れた手順に注目すると、10組中8組が「RU → 討論の進め方をめぐるやりとり → DU」となっていた。これは「日本語母語話者は討論の手順や形式にこだわる」というWatanabe (1993)の指摘や、「日本グループはRUから直ちにDUに入ることはなく、ポーズや討論の進め方についてのやりとりを挟んでから討論を始める傾向がある」という陳(2002)の指摘と重なるものと考えられる。つまり、接触場面における日本語によるグループ討論は、開始部に関する限り、陳(同上)で提示された日本語フレームが使用されていると言えよう。なお、検定の結果は5-1の開始部、5-2の討論テーマ間の移行、5-3の終結部をまとめて下記に脚注⁷として示す。

このことからまず予測されるのは、日本人が先頭に立って、討論の進め方についての議論を展

⁷ フィッシャーの正確検定を使って3グループのデータを検定した。「開始部」「テーマ間の移行」「終結部」のそれぞれの検定結果はまとめて以下で示す。

《3グループの結果》

グループ	討論開始までの手順		移行に参加した人数		終結の方法	
	RU → DU	RU → 進め方 → DU	1人で行う	2人以上	1人で終結	2人以上の同意で終結
台湾グループ	10	0	18	2	7	3
日本グループ	1	4	1	9	0	5
混合グループ	2	8	1	19	0	10

台湾グループと日本グループのデータは陳(2002)からとったものである。「移行に参加した人数」の欄の数字は、移行回数が1グループに各2回あることから、その回数を示す。其の他の数字はグループの数を示している。最大値は日本グループはそれぞれ10と5で、台湾グループと混合グループはそれぞれ20と10である。

検定の結果は以下の通りである。

[開始部] 台湾グループと日本グループ: $p = 0.0037$ (両側検定);
台湾グループと混合グループ: $p = 0.0007$ (両側検定);
日本グループと混合グループ: $p = 1.0000$ (両側検定)。

[テーマ間の移行部]

台湾グループと日本グループ: $p = 0.0000$ (両側検定);
台湾グループと混合グループ: $p = 0.0000$ (両側検定);
日本グループと混合グループ: $p = 1.0000$ (両側検定)。

[終結部] 台湾グループと日本グループ: $p = 0.0256$ (両側検定);
台湾グループと混合グループ: $p = 0.0031$ (両側検定);
日本グループと混合グループ: $p = 1.0000$ (両側検定)。

この結果は、「開始部」、「テーマ間の移行部」、「終結部」の三つの部分において、混合グループでは台湾グループよりも日本語グループに類似した方法が行使されていることを示唆していると考えられる。また、フィッシャーの正確検定を使用した理由は ① データがカテゴリデータであること、② データの母数が小さい、の二つである。

開することである。しかし、「討論の進め方」に関して発話した者を見ると、「RU → 討論の進め方をめぐるやりとり → DU」が観察された 8 組の中の 3 組は学習者によって行われていた。例 1 を参照されたい。

《例 1: 混合グループにおける開始部》

- | | | | |
|------|------|-------------------|----------|
| 1.1 | 実験者: | どうぞ. | |
| 1.2 | ポーズ | | |
| 1.3 | TF: | 司会. | RU |
| 1.4 | JM1: | じゃ. | 構成に関する発話 |
| 1.5 | @@@ | | |
| 1.6 | TM: | じゃ, 行きましょうか. | |
| 1.7 | @@@ | | |
| 1.8 | JM1: | そうですね. | |
| 1.9 | @@@ | | |
| 1.10 | TM: | ちょっとテーマを見せて, | |
| 1.11 | JM2: | どうして今の専攻を選んだのですか? | DU |

中国語フレームの開始部は、開始後直ちに討論内容について話し合うというもので、「RU → DU」という特徴を持つ。もし、それぞれの参加者が自文化の母語フレームに強く影響され、接触場面でもそのフレームを表出すると仮定すると、この場合、例 1 に見られるような学習者からの提示 (1.3) は考えられない。例 1 は「RU → 討論の進め方をめぐるやりとり → DU」で進められ、しかも、その提示は日本人ではなく学習者によって行われていた。つまり、本研究が対象としたデータに限るが、開始部は参加者の母語フレームより目標言語のフレームに強く影響されていたと言えるのではないだろうか。

5-2. 討論テーマ間の移行

グループに三つの討論題目を与えたことから、第一の討論題目から第二の討論題目へ、第二の討論題目から第三の討論題目へと合計 2 回の課題移行が発生する。本稿ではこの事前に与えた討論題目を「テーマ」、その移行過程を「テーマ間の移行」と呼び、各グループがどのような手順を踏んで移行を行っているかを分析した。「テーマ間の移行」として切り出した範囲は「先行テーマの内容に関する最後の発話」から「後続テーマの内容に関する最初の発話」までである。

混合グループで観察されたテーマ間の移行手順の典型を例 2 として次に示した。先行テーマに関する最後の発話の後、TF1 は 2.2 で相づちを挟んでから、まず移行せざるをえないのだという気持ちを述べて移行をほのめかし、次に 2.5 でテーマを読み上げて次のテーマへ移行した。移行にかけた時間に違いはあったが、混合グループ 10 組合計 20 回のテーマ間移行の中で、19 回はこのようにポーズや相づちなどを挟み、参加者同士が互いに協力しながら移行を完成させるという方式がとられた。先に見た討論の開始部と同じように、学習者の母語フレームより目標言語である日本語フレームが学習者によって使われている点も注目に値する。

《例 2: 混合グループの討論テーマ間の移行》

- | | | | |
|-----|------|------------------------|----------------|
| 2.1 | JM1: | そうそうそう。晴れてよかったです。 | 先行テーマの最後の発話 |
| 2.2 | TF1: | ねえ、楽しいことをもっと聞きたいんですが、@ | クッション + 移行の前触れ |
| 2.3 | | @@@ | |
| 2.4 | TF2: | すごい、さすが、さすが、@ | |
| 2.5 | TF1: | 今は日本語は学習しにくい... (略)... | 後続テーマの最初の発話 |

そして、この結論を裏付けるもう一つの現象は日本語フレームの特徴である「クッション」の使用である。例 2 の、2.2「笑いながら理由を説明する」がそれに相当する部分であり、これらは移行によって生じる中断がもたらす一時的緊張を和らげる機能を果たしていると考えられる。今回混合グループ 10 組が行った 20 回のテーマ間移行中、中国語フレームにはないこのような「クッション」という現象が 12 回観察された。12 回のうち 7 回は日本人によって行われているが、残りの 5 回は学習者によって行われていた。

一方、学習者の母語フレームの影響も観察された。それは、「最後の発話」から「移行の提示」までの話者交代の回数に表れていると考えられる。「移行の提示者」を見ると、日本人と学習者が 11 対 9 のほぼ同じ割合で移行を提示している。しかし、次の例 3 と例 4 を参照されたい。

《例 3: 学習者による移行の提示》

- | | | | |
|-----|------|--------------------|-------|
| 3.1 | TF1: | うん、面白い、ですね。うん。 | 最後の発話 |
| 3.2 | TF2: | 第二のテーマに入っているいいですか？ | 移行の提示 |
| 3.3 | JF: | はい。 | |
| 3.4 | | @@@ | |
| 3.5 | TF2: | すみません。日本語を... (略) | 最初の発話 |

《例 4: 日本人による移行の提示》

- | | | | |
|-----|------|----------------------|-------|
| 4.1 | TM: | 僕はドラゴンボールかな | |
| 4.2 | JM1: | あああ @ | |
| 4.3 | TM: | 僕の世代はそれ** @ | 最後の発話 |
| 4.4 | JM1: | そうだね | |
| 4.5 | | ポーズ | |
| 4.6 | JM1: | ふん~ | |
| 4.7 | JM2: | じゃ、次行きましょうか？ | 移行の提示 |
| 4.8 | TM: | はいはい | |
| 4.9 | JM2: | 日本語は学習しにくい言語だ... (略) | 最初の発話 |

例 3 は学習者が新テーマへの移行提示者の場合の典型である。例 3 から分かるように、移行提示者が学習者の場合、相づちやポーズは比較的少ない。話者交代の回数も全体を通して平均 2.4 回行っているだけである。それに対して、日本人は例 4 が示すように、話者交代が頻繁で、平均 3.5 回の話者交代をしてから移行の提示を行っている。この違いはそれぞれの母語の移行パターンを映し出していると言える。中国語フレームでは移行の手順が少なく、たった 1 人でも移行を完成することができるかとされている。学習者が接触場面において、例 3 の 3.2 のように、目下討論しているテーマについて結論が出たと自分が判断を下したら、直ちに次の新テーマへの移行を提示するというはその母語フレームの影響と考えられる。他方、例 4 の 4.7 のように、日本人

は接触場面においても、お互いに相づちを打ったり、先行の発話者や参加者への気遣いを示したりするという手順を踏んで始めて移行の提示を行うことができると言えよう。

しかし、テーマ間の移行では学習者の母語フレームが参加者に認知され適用されていたかと言うと、例 5 のような例も見られ、必ずしもそうとは言えない。例 5 を参照されたい。

《例 5: テーマ間の移行》

- 5.1 TM: ... (略), とても勉強になりました。はい、次。 最後の発話 + 移行の提示
- 5.2 @@@ 笑い
- 5.3 JF: 次で [いいですか?]
- TM: [大丈夫, 大丈夫, 大丈夫,
- 5.4 JF: まだ [大丈夫。
- TF: [まだ大丈夫なんですよ。うん,
- 5.5 TM: これは面白いよ。 再度移行の提示
- 5.6 TF: ああ, 子供の 最初の発話

例 5 の場合、TM は先行テーマに関する最後の発話 (5.1) を自分で行い、それをその討論の結論と判断し、そのまま同じターンで移行の提示を行った。これは学習者の母語フレームの典型的な移行方法(陳 2002)で、母語フレームをそのまま接触場に持ち込んだものと推測される。しかし、例 5 から分かるように、この TM の移行提示に対して、まず見られたのは参加者の間で起こった笑い (5.2) である。そして、笑いに次いだ日本人 JF の発話「次でいいですか?」(5.3) などにより、TM 以外の参加者は討論中のテーマが TM の発話(先行テーマに関する発話)を以て終了と見なしていいかどうかを再三お互いに確認をし合っていることが分かる。つまり、例 5 の参加者の反応から見ると、この場面ではこのように現テーマの終了と次のテーマへの移行を同一人が 1 人で完成させることは、もう 1 人の学習者も含めてなかなか了解されにくいことが分かる。

以上、混合グループのテーマ間の移行では母語フレームより目標言語のフレームの方が多く適用されているが、学習者の母語フレームの行使も一定程度は許容されているということが分かった。つまり、1 人が旧テーマを終了させ、別の 1 人が新テーマへの移行を提示することは許容されるが、中国語母語フレームに見られるような旧テーマの終結から新テーマへの移行まで、すべての過程を同一人が 1 人で完成させるということは許容されていないと言える。

5-3. 討論の終結部

ここでは討論の参加者がどのようにグループ討論を終結するかを見るのが目的である。討論の開始部が討論フレームの始まりを意味していることと同様、この部分は討論フレームの終わりを示し、討論フレームを分析する際もう一つの重要な境目である。本稿では討論内容に関する最後の発話から討論の終了が宣告される(つまり、別室で待機している実験の依頼者と呼んでくるという宣言)までの部分を「討論の終結部」とした。例 6 を参照されたい。

《例 6: 混合グループの終結部》

- | | | | |
|-----|------|------------|-------|
| 6.1 | TF2: | 結論はなし | |
| 6.2 | | @@@ | |
| 6.3 | TF2: | じゃ、一応ここまで、 | |
| 6.4 | JM: | うん、 | |
| 6.5 | TF1: | よろしいかな？ | 終結の提示 |
| 6.6 | TF2: | うん、 | |
| 6.7 | TF1: | じゃ、呼んできます。 | 討論の終結 |

混合グループ 10 組の中 8 組の終結提示者は、例 6 のように、質問文の形で討論の終結について他の参加者の同意を求めている。そして、他の参加者の同意 (6.5) を得てから、討論が終結される。残りの 2 組は「討論を終結してもいいか」ということを他の参加者に確認するのではなく、最後のテーマの指示「グループで結論を出してください」にしたがって「結論」を述べ、「この結論でいいか」と尋ねることで討論の終結としていた。つまり、他の参加者の同意を求めて終結するか否かという観点から見ると、10 組がすべて同じような手順をとっていたと言える。

このように他の参加者の同意を求めること、参加者が協力して討論を終結するという方法は日本語母語フレームの特徴に類似している。他方、学習者の母語フレームの分析結果によると、台湾人中国語母語フレームでは「1 人で討論の終結を宣言する」という形が多く使用されている。しかし、今回のデータには、1 人の判断でグループ討論を終結した例は 1 例も見られなかった。

6. まとめと今後の課題

目標言語である日本語とは異なる特徴を示す母語フレームを持つ台湾人中国語母語話者が日本人と日本語でグループ討論を行う際、そのグループ討論のフレームはどのようなものであり、母語フレームとどのような関係があるかを明らかにするため、本稿では接触場面を設定して、討論データを収集した。そして、討論の骨格に注目し、「討論の開始部」「テーマ間の移行」「討論の終結部」の三つを取り上げて、分析を行った。

本稿は二つの研究課題を設定した。「台日接触場面では、どのような討論フレームが構築されているか。それは、目標言語(日本語)フレームと中国語母語フレームのどちらにより強く影響されていると考えられるか」及び「台日接触場面では、中国語母語フレームはどのように行使されているか」である。結果は、まず全体的に見ると、学習者の母語フレームより目標言語である日本語フレームの影響が相対的に強かったと言える。そして、日本語フレームは日本人だけでなく学習者によっても積極的に行使されていた。次に、部分的に見ると、学習者の母語フレームの適用は日本人に許容されるものと、許容されないものがあるということが分かった。例えば、現テーマについての討論を終わらせる人と、新テーマへの移行を提示する人が別々であれば、許容されるが、それが同一人である場合になると、学習者によっても許容されないことのあることが示さ

れた。また、このことから本稿の最初に述べた「中国人は唐突に自分の言いたいことだけを言い、あまり周囲の空気が読めない」という指摘に対しては、「テーマ移行の手順を1人で、しかも一つの発話の中で、すべて行う」という中国語母語フレームでは極めて自然なテーマ間の移行様式を、日本語での討論に持ち込もうとしていることを指していることが窺われた。ただし、討論自体の始め方や終わり方については、学習者は日本語母語フレームにのっとなって、それを積極的に行使していたことも分かった。

本研究が提示した結果は接触場面の10組40名によるグループ討論の分析結果でしかなく、滞日年数や日本語学習歴、ジェンダーなど様々な要因を考慮した更なる研究の積み重ねが必要である。しかし、本研究は一般化に向けての仮説を生成するのに必要な一つの傾向を示唆することができたと言える。

他方、「ポーズ」「トピックの転換」「発言順番と進行役」などの討論の内容面からの分析を行うことで、日本語による接触場面のフレームの実態をより明らかにするとともに、中国語を使用する混合グループのデータを更に増やすことで、接触場面の討論フレームの全体像を解明し、フレームと文化との関係を明らかにしていくことが求められる。

人間は人として成長していく過程で自らが属している言語・文化集団に特徴的な言語行動のフレームを一つ一つ自己の中に取り込んでいく。同時に、本研究がその一端を明らかにしたように、それらは状況に合わせて個々人の中で調整され変容していくものと考えられる。多文化間の接触が日常化していく現代社会では、そこで観察される問題を考えるに当たっても、フレーム分析は一つの重要な手がかりになり得る。しかしながら、文化とフレームのダイナミックな関係を探るにはグループ討論のフレームの十全な分析に加え、他の様々の言語行動を取り上げた更なるフレーム分析の積み重ねが必要である。今後の課題としたい。

参 考 文 献

- Gumperz, J. J. 1982. *Discourse strategies*. New York: Cambridge University Press.
- Goffman, E. 1986. *Frame analysis: An essay on the organization of experience*. Northeastern University Press (de.), Reprint. Boston: Northeastern University Press.
- Tannen, D. 1993. *Framing in Discourse*. New York: Oxford University Press.
- Watanabe, S. 1993. *Framing in Discourse: Cultural Differences in Framing: American and Japanese Group Discussions*. Tannen, D. (ed.), New York: Oxford University Press. 176-209.
- 久米昭元・徳井厚子・徐一平(2000)「コミュニケーション様式の日米中比較研究——小集団討論の質的分析を通して——」『平成11年COE形成基礎研究費研究成果報告』(代表 井上和子), 神田外語大学, 625-670.
- 斎藤みちる等(1997)「談話分析から見た異文化間コミュニケーション——日本人の言語行動を中心に——」『広島大学日本語教育学科紀要』7, 広島大学日本語教育学科, 185-192.
- 佐々木由美(2002)「異文化間コミュニケーション研究としての相互作用分析」『社会言語科学』第4巻第2号, 社会言語科学会, 57-69.
- 泉子・K・メイナード(1993)『会話分析』, くるしお出版.

- 曹 永湖 (1994) 「談話における相づちの運用と機能」『東北大学文学部日本語学科論集』4, 東北大学, 63-74.
- 田中 敏 (1996) 『問題の発想データ処理・論文の作成 実践心理データ解析』, 新曜社.
- 陳 明涓 (2002) 「フレームに見られる文化的差異——台日大学生によるグループ討論の場合——」『人間文化研究年報』26号, お茶の水女子大学大学院人間文化研究科, 39-46.
- 東京大学教養学部統計学教室 (1991) 『基礎統計学 I 統計学入門』, 東京大学出版会.
- 徳井厚子 (2002) 「小集団討論場面における話題移行の影響要因——なぜ日本人の討論が雑談になるといわれるのか」『異文化間教育』16号, 異文化間教育学会, 130-139.

参考資料 各グループのデータ一覧

グループ番号	実験協力者のデータ(年齢)				録音時間 (分:秒)	録音場所 録音日
	日本語母語話者		台湾人日本語学習者 〔日本語学習歴〕			
グループ 1	JM (28)	JF (20)	TF1 (21) 〔5年〕	TF2 (27) 〔7年〕	31:26	某ビルのロビー 2004.2.11
グループ 2	JM1 (21)	JM2 (21)	TF1 (30) 〔7年〕	TF2 (26) 〔7年〕	19:45	某喫茶店内 2004.2.16
グループ 3	JM1 (27)	JM2 (24)	TF (32) 〔5年〕	TM (35) 〔5年〕	19:45	某大学の教室 2004.2.18
グループ 4	JF1 (20)	JF2 (21)	TF1 (35) 〔15年〕	TF2 (29) 〔10年〕	32:05	某大学の教室 2004.2.21
グループ 5	JF1 (20)	JF2 (20)	TF1 (32) 〔10年〕	TF2 (25) 〔4.5年〕	17:56	某大学の教室 2004.2.23
グループ 6	JF1 (23)	JF2 (25)	TF (34) 〔11年〕	TM (27) 〔8.5年〕	24:07	某大学の教室 2004.2.26
グループ 7	JM1 (26)	JM2 (24)	TF1 (27) 〔8年〕	TF2 (29) 〔4.5年〕	38:14	某大学の教室 2004.3.8
グループ 8	JF (25)	JM (30)	TF1 (35) 〔10年〕	TF2 (32) 〔9年〕	34:42	某学生会館の 交流ルーム 2004.3.14
グループ 9	JM1 (23)	JM2 (25)	TM (29) 〔6年〕	TF (25) 〔6年〕	32:16	某大学の教室 2004.3.23
グループ 10	JF1 (25)	JF2 (19)	TF1 (21) 〔4年〕	TF2 (22) 〔4.5年〕	34:35	某大学の教室 2004.2.10